
魔王と家来と3LDK

バッタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と家来と3LDK

〔二十一〕

N
6
0
2
0
J

【作者名】

バッタ

【めりすじ】

何の変哲もない住宅街、並ぶ家の一つに少年は居た。彼は魔王、節約家の魔王、近所付き合いを大切にする魔王、家来に馬鹿にされる魔王、これは、夢の魔王城を手に入れるために奮闘する魔王の話である。

「あつ、カイル。液晶テレビ買つて」

「カイル。 ちょっと欲しいものが……」

「最初からボクの意気込みをつぶさないで！！」

第1節プロローグ

魔王とは魔界に住み、世界を混沌の闇に覆い尽くし世界を我ものとする事が魔王の使命である。その過程において、信頼における家来と共に魔道を邪魔する者を蹴散らし、時に家来を守り、家来に背中を預け、そして、共に進むその先に究極の魔道が存在する。b
y 馬鹿でも分かる魔王道 著作 とある勇者 発行 猫橋書房

それは、少年が手にしている書物、税込み510円の書物一文だ。何故、勇者が魔王の事について永遠と550ページと書き綴つているのは分からないが、この一文は魔王の定義そのものもある。その時代の魔王によって、少しばかり内容は変わってくるが、その書物を手にする少年は本をパタンと閉じると、はあと重々しい溜息を吐いたと

「つて書いてあるんだけど。ねえ、どう思つ?」

その重たげな空気を背負つたまま、少年は白髪の髪を揺らしながら横にいる、ちやぶ台の上の煎餅を手に取りバリバリとかじつている少女に話し掛けた。

「ああ……」

特に興味なし。そんな感じで少女は再びちやぶ台の上の煎餅に手を伸ばす。はあ、と少年は溜息を吐きながら横で座布団に座る少女を見る。まず、印象に残るのは灰色の髪。そして、その中でまだ燻っている様な印象を受ける薄い赤色の目。だが、その目はやる気が感じられない、半分閉じられて眠たげである。

少年は負けずに口を開く。

「上下関係って大事だとボクは思うんだよ」

「うん……大事だね。わたしもそう思つ」

その瞬間、少年に衝撃が走った。この話を開始して軽く一時間。少年の握る拳は達成感でブルブルと震えていた。

「ソフィイ！ やつと分かつてくれたん！」

「カイル、お茶」

「じゃなかつたの！？」

しかし、その達成感は5秒も持たなかった。上下関係を理解した少女は茶！－！と描かれた湯飲みをグイッと少年に突きつけた。カイルと呼ばれた少年はもしかすると、自分の立場はこの『家』で一番低い位置にあるんじゃないだろうか？ 少年はそんな錯覚が最近生まれつつあった。しかし、そんな訳はあるはずはない。それは自分が何なのかという事考えればすぐにも分かる事だ。

「ボク一応、魔王なんですけど？」

「知ってる。お茶」

「君の主なんだけど？」

「知ってる。お茶」

尚も少年がソフィイと呼ぶ少女は湯飲みを突き出したままジトツとカイルを睨たげに睨みつけ、お茶と言つてゐる。家来が主にお茶を要求するという、不可解な図がそこにはあつた。だが、カイルは魔王で、ソフィイと呼ばれた少女はカイルの家来である。本来そんな事はあつてはいけない、カイルはそれを分かつてゐるので、暇さえ見つければこゝやつて、主と家来の関係を確立させようと奮闘しているのだが、結局はカイルが折れる事になる。

「はあ……お茶何でもいいよね」

そう、自分が大人なんだ。心を広く心を広

「新茶がいい、そして、煎餅飽きた。他の出せ」

近くに包丁があればやつちやう所だつたかもしれない。湧き上がる殺意を押さえ込み、カイル・オルバースはお茶を入れながら家の家訓を思い出していた。『オルバース家はいかなる時も家来を信じ、家来の事を先に考えよ』自分の事より家来の事を考へろ。つまりそういう事だ。家臣は宝、家臣なくして魔道はない。はあとカイルは溜息を吐きながら、ソフィイの前のちゃぶ台に湯のみを置きポテチを渡した。

そんなカイルが気になつたのかソフィイが心配そつた声で尋ねた。

「どうしたの？ なにか心配事？」

「……」

カイルはパタツと静かに床に倒れると、静かに泣き始めた。

「？」

そんなカイルの気苦労も知らない家来ソフィィは倒れたカイルを不思議そうな表情でしばらく見ると、はつと思い出したかのように意識をポテチに向け中身をおいしそうに食べ始めた。

* * * * *

家来に舐められている。まあ家訓があるから仕方ない。そんなことを居間で魔王は考えていた。正直、今では生きる事に精一杯な状態である。魔王は家計簿をつけながら、溜息をつく、毎月払う家賃がすぐそこに迫っている。平屋、寝室3、居間、キッチン完備（コンロは別売り）トイレ完備、ユニットバス完備、なのに月額3万円と激安、人間界にやつて来た魔王はそれに飛びついた。

3万円 + 光熱費 etc. . . これに苦しめられている。魔界から持ってきた物品を質屋に入れて今まで凌いで來たが、今回家賃を払えれば資金は底をついてしまう。

どうするか迷つていると

「なんで、人間にお金払わないといけないの？」

ソフィィがひょっこりとポテチを食べながらカイル横に現れそんな事

呟いた。カイルは、溜息を吐きながら虚ろな瞳でソフィーを見ながら、細く口を開いた。

「人間界のルールには従わないといけないんだよ。その世界にはその世界のルールがあるんだから」

ポンポンとカイルはソフィーの頭に手を置くが、ソフィーはふーんと不満そうに家計簿をまじまじと見て

「あつカイル」

「なに?」

「これ食べたい」

と、突然、思い出したかのようにソフィーはそのうす赤い瞳を爛々と光らせて、何かのチラシを懐から出した。

「ん? なになに? 高級洋菓子詰め合わせセツト、春のお得キャンペーン、今なら1万ポツキリ・・・・・・」

カイルは一度、深呼吸して、ソフィーと向き合い。優しい笑顔で語りかけた。

「金ねえって言つてんどうが」

えつー、とソフィーは、いかにも不満そうな顔で頬を膨らませて、じやあと言つてから、他のチラシをどこからともかく取り出しカイルの田の前でぱつと両手で大きく広げた。

そこについた物は、数多くの商品が表示されているスーパーのチラシだった。その商品の一つに赤ペンで印を付けた大きなマルがカイルの目に入る。

「激安材料チヨコレート100円、今ならお一人様5個限定、愛しい彼のために手作りチヨコなどはいかがでしょうか・・・・・?」

最後の方は気になるけど、これぐらいならとカイルは思つて、うんと呟いた。

「しょうがないなあ、じゃ、買いに行こうか。ちょっと調味料が無くなりかけてたし」

「着替えてくる」

言葉を聞くや否やソフィイをバツと身を翻して自分の部屋に向かって走つて行く。

魔王は考えた。もしかすると最初の馬鹿高いお菓子はこのための伏線だったのではないか。と、ソフィイの部屋を見ると部屋に入る途中のソフィイの口角が不気味に釣り上がっているのが見えた。

「・・・・・騙された」

家賃 + 光熱費 + ソフィイの食費、これがカイル家の家計に大打撃を与える3代要素である。

第1節プロローグ2

ここ桜川第一都市。与えられた使命を遂行するために魔王が住む事になった人口150万人の超大型都市だ。農業地区、工業地区、商業地区、住宅地区、学園地区この5ブロックを中心に構成される近未来型第二都市。

その5ブロックで構成されている内の一つ商業地区、桜川旧市街地に魔王とソフィイが居た。目的は勿論、買い物だ。しかし、魔王たちの見た目は大きく変わっていた。カイルの白かつた髪は漆黒の黒、服装も今時の若者が着る冬らしい、動物の毛が付きのフードが目立つ黒のダウンジャケットの中は白のオシャレロントに青色の宝石をはめ込んだリングを銀のチェーンにとうした物を首から下げ、そして、茶のカーポパンツにカーキ色のブーツ。一見、ただの人間。人間界ではこの白い髪は目立ってしまう。そして、魔界での黒を強調したマントなども異様に目立ってしまう事もカイルはやってきて当日に散々味わっていた。

周りの人間からは変な目で見られる一方、興味本位で話し掛けている高校生、因縁をつけて金を巻き上げようとする怖い人たち（運良く治安部隊という都市の安全を守る者達がカイルを助けたのだが）、なので、カイルはその時から色々考え今の余り目立たない状態になっている。髪は黒彩スプレーで一時的に黒色にしているのだ。

並々ならぬ努力でやつと目立つ事がなくなり、浮かない存在になつたのである。しかし、何故かカイル達に注目の視線が集まっている。歩いていると、いきなりカメラで撮られたりするのである。何故か、そんな事は簡単な事だ。カイルは余り表情を崩さないまま隣を見る。

そこには、黒と白をベースにしたゴスロリを着こなし灰色の長い髪を靡かせ、薄赤い瞳で静かに前を見つめてカツカツと歩くソフィイの姿があった。

「せめてお願ひだから、これ着けてね」

カイルが引きつった笑みでソフィイに色付きの伊達眼鏡を差し出す。それ有何も言わずに着けるソフィイを見てカイルは思う一緒に家を出でていれば、こんな事にはならなかつたのだろう。と

家を出る時の事だ。「ちょっと時間が掛かるから先に行つて、すぐ追いつくから」この言葉を安易に受け取り、先に市街地に向かつたカイル。女の子は着替えに時間が掛かる生き物だと父上が母上から隠れながら呟いていた事を思い出しながら適当に歩き、店が増え周りに活気が満ち人が増えてきた時だつた。後ろの方から、人がざわめく音が聞こえて振り返つてみれば

「魔王…………お待たせ」

ゴスロリを優雅に着こなすソフィイさんが登場したのであつた。頭に黒彩する訳でもなく、目を隠すような色付きの眼鏡を付ける訳でもなく、素の状態のソフィイさんがそこにいたのだった。

痛々しい視線が集まる中、平然と佇み首を可愛く傾げるソフィイに向

かつて思わず魔王は叫んだ。

「ボクの努力を返せえええええーー！」

第1節プロローグ③

「魔王…………何を怒つていいる?」

ソフィイはムスッとした、カイルの様子を伺うよつに話し掛けた。相変わらず奇妙な目で見られたりするのだが、長時間こういった視線を浴びつづけると慣れてくるものだなあ。と、カイルは芸能人もこういった感じなのかな? と若干溜息を吐きながら思つ。

「怒つてないよ」

カイルは口ではそういうものの、実際は機嫌が悪かつた。それを見透かしたのか、ソフィイは

「機嫌なおしてくれないと」

「?」

「キャー痴漢です。て、大声で叫ぶ

と、感情のこもっていない声で凄い事を口走ったソフィイにカイルは、ごばあっと吹き出し、軽くソフィイに詰め寄つた。今の言葉を聞かれれば、治安部隊に追い掛け回されるはめになつてしまつ。

「おい、口う。ビ】で覚えてくるそいつ言葉

「私の知識を甘く見ない事だ」

「絶対偏つてる! その知識絶対あらぬ方向に偏つてるよね! ?」

こういった、変な知識は本当に一 体どこで仕入れて来るのだろうか、カイルは教育方針を誤ったかもしないと自分を責め始めて、ふと気づいた事があった。

「今気づいたけど、軽く脅したよね？」

「…………何を言うの。脅したのではない」

それを聞いてカイルはホッと胸を撫で下ろしてソフィイから離れ

「脅迫した」

ドンッと地面にめり込むぐらい勢い良く地面に倒れて、すぐさまソフィイに詰め寄った。

「一緒にじゃねえか！」

「若干ニコアンスが違う」

「細かい！ 大雑把に見えて案外細かいよソフィイさん！」

ギヤーと叫ぶカイルに対し、冷静に言葉を紡ぐソフィイ。そんな時だった。

「あの、すみません」

「」「？」

急に話し掛けられてカイルとソフィイの会話が止まる。その声の主は

後ろに居た。黒のスーツをピチッと着こなす、背の高い男だ。20代後半ぐらいだろうか、髪はその身長を更に上へと伸ばそつとするみたいに逆立てるという特徴的な髪型をしている。

その男は薄っすらと目が見えるサングラスを掛けながら人当たりの良い笑みでこちらを見ている。カッコいい男とはこういう事を言うんだとカイルは思う。それが証拠に、通りすぎた女子高校生、「お、はたまた奥様方、チラチラと頬を染めてその男を見ている。

(なるほど、女人人はこういった人が好みなのか)

納得しながらカイルは口を開く。

「何か御用で?」

さつきのソフィーとの会話から一変、カイルも人当たりの良い笑みでその男に答える。

すると、何故かその男はカイルを観察するように自分の顎に手を持つて行き、上から下までじっくりとカイルを見ている。

背筋に走るこの悪寒は何だろう? カイルは必死に身震いを抑えながら、再び問い合わせる。

「あの・・・・」

「あ? ああ、『めん』『めん』。余りに可愛いから見惚れちゃって」

「・・・・」

「いけない、その男は笑う。見惚れる……？ 可愛い……？ その言葉がソフィイではなくカイルに向けられている言葉だと理解した時、カイルはズサッと大きく退いた。いや、引いた。大きな拒否反応と共にカイルは感じた。

（いけない、大事な何かがこのままだと奪われる気がする……・ツ！）

カイルが制御不能だと理解したソフィイはカイルに変わって口を開く。

「それで何の用？」

「おつづー！？ 君も可愛いなあ、人形さんみたいだぐふおつー！？」

ソフィイに気づいた男は、感激したのか満面の笑みで手を広げて喜び、頭に怒りマークを浮かべたソフィイが長身男の言葉を遮るように質問に答えると言わんばかりに腹部へ膝を入れた。それはもう流れる様な仕草で思いつき。

力無く倒れこむ男、そこにはイケメンのナンパ男を華麗に蹴散らしそれを見下ろすゴスロリ娘という奇妙な構図が存在した。

「・・・・・」

「おいいいっ！？ ソフィイちゃん！ 少しうざいからって膝は駄目だつづに！ ていうか暴力で解決しようとする癖何とかしない！ 今後のボクの身の安全のためにもツ！」

「魔王何を言つているの？」

「？」

「魔王への暴力は私のストレス発散方法、無くなるわけがない」

「家来がボクをサンドバックとしか見ていない！？」

もはやナンパ男など気にせず、カイルはショックを受ける、それを見たソフィィはいつもと違うやさしい声で

「違う違うじゃない、魔王は私に取つて大切な・・・・・・」

「ソフィィ・・・・・・・・

「給仕係」

「ソフィィ・・・・・・・・ありが つて違うじゃん！ 今いい雰囲気で騙されかけたけど、給仕係って何！？ ボクはいつからソフィィの専属シェフになつたの！？」

更なる追い討ちを繰り出してきた。

「何を今更・・・・・・・・

「怖い！ ここの子怖いよ！」

そんな問答を繰り返しているうちにカイルは人込みに囲まれている事に気づいた。人の輪の中には、ナンパ男を暴力で黙らせるゴスロリ娘、それと言い争う二人。

治安部隊を呼ぶには十分な素材が揃っていた。そして、唐突に聞こえてくる、明らかにこつちに向かって走つてくる複数の足音、青ざめていく表情、そして

「逃げるよー ソフイー！」

「走るのイヤ」

「チヨコが買えなくともいいのかー!?」

「私逃げる」

「あつ ロラッ！… 待ちなさいー！」

「つああああつあー？ 来たアアアー！」

「つあー」

「もつと緊張感もつて逃げてくんないー!?」

買い物をしに来ただけなのに、カイルは治安部隊に2時間近く追いかけられる羽目になつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6020j/>

魔王と家来と3LDK

2010年10月31日07時46分発行